

鹿児島県

街道 1

鹿児島県には2つの有名な石畳が現存する。龍門司坂の石畳（始良市、元文6（1741）、国史跡）と白銀坂の石畳（始良市・鹿児島市、18世紀前半?、国史跡）**A**である。ともに大口筋（薩摩街道）の山越えの道で、街道自体の開設は古い（前者は寛永12（1635）、後者は戦国時代（1550代）、18世紀に入り石畳化された。同じ街道筋、近接した所在地、同時代なので両者は似ていて当然と思えるが、実際には下の写真のように全く異なっている。左の龍門司坂では、加工し易い溶結凝灰岩の石切場が近くにあったため、石を四角に切り出して並べられ、日本の石畳の中では異例と言えるほど見事な石組みを誇る。一方、右の白銀坂は、地山が硬い安山岩なので、石を切り出すのではなく、転石や埋没した石に若干の手を加えて敷き並べただけの簡易な構造である。



街道 2

鹿児島は、橋本勘五郎と並ぶ肥後の名工・岩永三五郎が後半生を過ごした場所である。その岩永三五郎の最高傑作とも言える甲突五橋は、平成に入って実施された河川上流部の直線化により洪水時のピーク流量が上がったため、平成5の豪雨で武之橋と新



上橋が流失、西田橋（鹿児島市、弘化3（1846）、県有形）**A**他2橋はかろうじて残ったが、そのまま現地に残すことには無理があったため、祇園之洲に移設された。その際、西田橋は移設前から県指定の文化財だったことから文化財としてのオーセンティシティを保った移設・復原が行われ、高麗橋と玉江橋についてはかなり大胆な復元が行われた。西田橋の復原で惜しまれる点は、長年見慣れた平坦化した形ではなく、建設当初の緩やかな太鼓型に形状変更したため、橋中央部のアーチ石材や高欄石材に不要な加工を強いられたことである。

街道 3

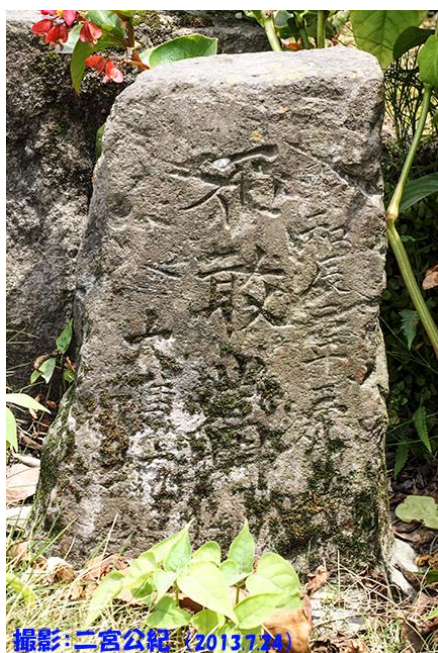
鹿児島のもう一つの特徴は、石堀を有する集落が県内各所に見られる点であろう。代表的存在は、知覧武家屋敷群の石堀（南九州市、17世紀中～18世紀、国重伝建）**A**と上甕〔かみこしき〕島の里町集落の石堀（薩摩川内市、江戸期）**A**と土泊〔あまどまり〕集落の石壁（いちき串木野市、江戸期?）**A**と大当集落の石堀（南さつま市、江戸期?）**A**である。前二者が武家屋敷、後二者が農村と漁村であることから、石堀が社会的地位や職業によらず普遍的に用いられたことを意味している（次ページ左上の写真は、上甕島の里町集落の石堀）。

街道 4

宮崎・鹿児島・沖縄の3県の特徴は石敢當が日常生活の中で当たり前のように存在している点である。



石敢當は丁字路や三叉路などの突き当たりに設置された魔除けであるが、本データベースでは道路関係の構築物に分類している。3県とも実際の建立数は多いが、紀年銘のあるものは非常に少ない。石敢當の価値は、古さ、経緯、形態、大きさ、刻字内容などで決まるが、経緯はほとんどの場合不明、形態と大きさ、刻字内容は類似しているため、古さが重要な価値判断基準となる。この点では、宮崎県えびの市の原田の石敢當（元禄2（1689））が国内最古とされてきたが、今回の調査で松山町泰野の石敢當（志



布志市、元和2（1616）**A**が最古と判明した。この石敢當は紀年銘が「□和辰二年」となっているため見過ごされたと思われるが、「和」「辰」「二」の組合せは元和しかないので、元和2と確定できる。

舟運 1

鹿児島県の海運の特徴は大型の防波堤の存在である。捍海堤（指宿市、天保5（1834）、国登録）**A**と羽島漁港の防波堤（いちき串木野市、江戸期）**A**と鹿児島港新波止（鹿児島市、嘉永6（1853））**A**が全国的に見ても優れた防波堤で、一つの県に3ヶ所もある



例は他にない。捍海堤は長さ215mと、近世の防波堤としては現存する最大級であるだけでなく、側面が階段状、頂面が曲面、先端の3次曲面が美しく、溶岩色をした溶結凝灰岩で造られているのも鹿児島らしい。羽島漁港の防波堤は宮勾配を持った石積が珍しく、さらに、西郷隆盛が無名の青年期に漁港を修復したという史実も貴重である。

舟運 2

鹿児島らしいもう一つの海運遺産は、奄美の碇石群で計8基が確認されている。他県で碇石が集中しているのは、元寇由来の碇石の多い福岡市のみである。奄美の碇石は、宋・元時代の中国船の石製イカリで、この地域が九州と琉球を結ぶ交易の拠点であったことを示す遺産と考えられている。

農業 1

鹿児島県は農業遺産の多い県ではないが、特筆に足る農業施設が一つ存在する。それが、川畑井堰（南さつま市、享保年間（1716-36）、市史跡）**A**で、近世由来の取水堰堤としては全国唯一の階段状の取水堰であり、水の流れが非常に美しい。



産業 1

鹿児島で特徴的な遺産に、全国でこの地域だけに見られる石組の豎形製鉄炉がある。出雲や安芸からたたら製鉄職人を招請したとの記録が残る種子尾製鉄遺跡（南九州市、延宝 2 (1764) 以降?) **B** では、恐らく土製箱型炉だったものが、炭屋製鉄遺跡（南大隅町、江戸期（初期?、19 世紀））**B** で土製豎形炉（床は石敷）となり、さらに、原料である火山灰に見合った石組豎形炉へと進化していったと考えられている。写真は、石組豎形炉の二川製鉄遺跡（南大隅町、江戸期（18 世紀前半～19 世紀））**B** で、県内では他に 5ヶ所の同型炉が確認されている。

提供：上田 耕



防災 1

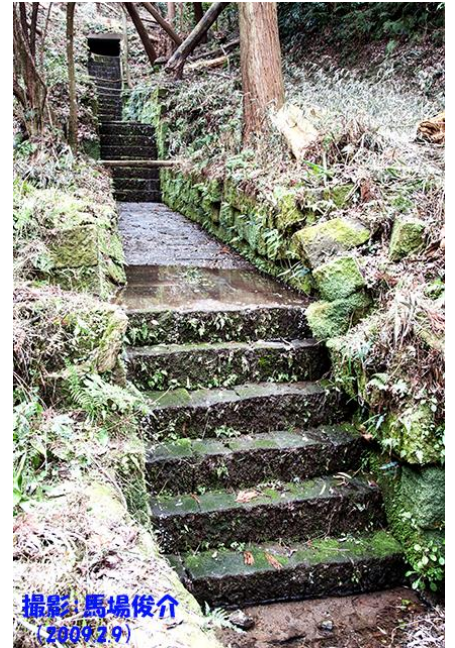
全国的に見ても型破りな形態の河川堤防が、長崎堤防（薩摩川内市、貞享 4 (1687)）**A** である。第二代薩摩藩主・島津光久が、普請奉行・小野仙右衛門に命じて造らせた川内川左岸の鋸の歯状の石堤防で、この堤防により川内川の激流が抑えられ、米の不作地帯だった高江地区が川内一の米所になったと言われる。鋸の歯状の突起は 8ヶ所あり、切石が階段状に積み重ねられている。



撮影：馬場俊介 (1997.11.13)

防災 2

鹿児島らしい防災施設は、シラス台地の崩壊防止用の排水溝である。現存するものとしては、中原の治水溝（いちき串木野市、嘉永 5 (1852)、市史跡）**A**、袴田落とし（いちき串木野市、嘉



撮影：馬場俊介 (2009.1.9)

永年間か?) **B**、下原の治水溝（日置市、嘉永 2 (1849)、市建造物）**B** が知られている。どの排水溝も、急な斜面に合わせて階段状になっており、階段以外の水路の底には一面に平石が敷き詰められ、両側壁も石垣という他では見られない特徴的な構造となっている。ただ、少し放置されるだけでアクセス困難となるため、訪問には時期と除草のタイミングが必要となる。

防衛 1

幕末の有名な生麦事件（文久 2 (1862)）に端を発し、賠償金と犯人の処罰求めて鹿児島湾に侵入したイギリス艦隊との間で薩英戦争（文久 3）が勃発する。その際、艦隊に対し陸上砲台（計 80 門）から先制攻撃が行われたが、砲 11 門が置かれた天保山砲台（鹿児島市、嘉永 3 (1850)、市記念物）**B** には、唯一、砲台の台座（径 6.4m）が残っている。



撮影：二宮公紀 (2012.1.17)